

甲骨文字談義(4)

吉池孝一

甲骨文字に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおりです。

佐藤久美：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに甲骨文字の勉強会をはじめた。

〈第4回目〉

安井教授：前回の勉強会では、貞人の発見をめぐって議論をしました。今後は、拓本を使って甲骨文を実際に読むことにしましょう。その前に、どのように読むか考えてみたいのですが。

《甲骨文への入門》

安井教授：これは『甲骨文合集』13冊(中国社会科学院歴史研究所、中華書局、1978-1983年。41956片の拓本・模写を収める)の6冊目に掲載された拓本(16881番)の一部分で、『鉄雲藏龜』(劉鶚著、1903年)に収められていたものです。このような甲骨文を資料として、私たちは、どのような手順で勉強をすすめるか、ということの問題にしたいのです。



16881

佐藤久美：甲骨文を漢字楷書に置き換えたものに拠るのも一つの方法ですね。そのような研究成果はないのでしょうか。

安井教授：『甲骨文合集』の索引が二種あります。一つは『殷虚甲骨刻辞摹写总集』2冊(姚孝遂主編、中華書局、1988年)で、『甲骨文合集』の順番で甲骨文をそのまま漢字楷書に置き換えたものです。いま一つは『殷虚甲骨刻辞類纂』3冊(姚孝遂主編、中華書局、1989年)です。こちらは同じ甲骨文字を含む文を一ヶ所にまとめたもので、甲骨文字の用法を検討するうえで有用な索引となっています。今回の勉強会を機に、図書館から借り出しました。この拓本(16881)の漢字楷書は「癸丑卜貞旬無咎」となっています。

山村健一：「癸巳卜貞旬無咎」ですか。この索引によると、最初から漢字の楷書が示されるわけですね。甲骨文字を勉強しているという実感が湧かないのですが。甲骨文字

と漢字楷書を対応させた簡便な表があれば、その表を使って、甲骨文字を漢字楷書に置き換えながら、意味を確認していくことができるのではないのでしょうか。

佐藤久美：漢字楷書に置き換える作業をすれば、解読の醍醐味の一部を味わうことができるかもしれませんね。「甲骨文字簡表」(松丸道雄氏作成)¹を利用するというのはどうでしょう。この表は第2回の勉強会のときに紹介しました。194字の甲骨文字と漢字楷書の対応表です。漢字楷書を、音読みによりアイウエオ順にならべ、その下に甲骨文字を配したものです。

山村健一：アイウエオ順ですか。甲骨文を読むという目的に合うのでしょうか。甲骨文は{干支+ト+貞人名+貞+問う内容}となっていますので、まずは、十干と十二支、貞人名がまとまっていると便利ですね。「貞」以下の“問う内容”については、名詞、動詞など、ザックリと内容によって分かれていたならば使いやすいのではないのでしょうか。

安井教授：甲骨文字を内容によって分けたものに『甲骨文簡明詞典 一ト辞分類読本』(趙誠著、中華書局、1988年)があり、参考になります。それから、『甲骨文選注』(李圃選注、上海古籍出版社、1989年)という甲骨文の勉強に適した本があります。この本には、甲骨文の模写と、それに対応する漢字楷書があり、個々の甲骨文字について詳しい注がついています。注の甲骨文字と漢字楷書を内容別に並べたならば、簡便な対応表ができるのではないのでしょうか。

山村健一：甲骨文字は手書きということになるのでしょうか。

安井教授：研究室のパソコンに市販のフォントや無料配布のフォントを入れておきましたので利用してください。今後の作業としては次のようになります。

1. 簡表を作る。
2. 簡表を使って甲骨文の甲骨文字を一つ一つ漢字楷書に置き換える。
3. 甲骨文の内容を検討する。

なお、甲骨文字の表ですが、詳しくすぎるとかえって使いづらいものとなってしまいます。佐藤さんが紹介してくれた「甲骨文字簡表」程度の分量の表を目指したらどうでしょうか。どなたか表の作成をお願いします。

佐藤久美：やってみます。すこし時間をいただけませんか。

安井教授：それでは、今日の勉強会はここまでにして、一週間後に会いましょう。

・・・・・・・・一週間の後・・・・・・・・

《甲骨文字の簡表》

安井教授：佐藤さん、表はできましたか。甲骨文字と漢字楷書を対応させ、内容別に分けた簡便な表、ということでしたね。

佐藤久美：はい。『甲骨文選注』を中心に作りしました。注記に出てくる文字を内容別に並べ、いくつかの文字を他の資料で補いました。200字程度になります(次頁の表を参照)。

安井教授：そうですか、それではこの表を「内容別甲骨文字簡表」とよぶことにしましょう。ところで、甲骨文字に“対応する”漢字楷書を選ぶのは、なかなか難しいとおもうのですが、どうでしたか。

佐藤久美：はい、参考になる本はないかと探しました。講談社現代新書『甲骨文字の読み方』(落合淳思著、講談社、2007年)が参考になりました。それによると、「甲骨文字を読むこと(以下、解読とする)において、最も重要な作業が、甲骨文字を現在の漢字に置き換えることである。そのために研究者が用いる方法には、大きく分けて二種類ある。一つは文字の意味から判断する方法であり、もう一つは文字の形から解読する方法である。」とありました。

¹ 「甲骨文字のしくみ」『甲骨文の話』(大修館書店、2017年)中の表。

a 干	1 十 ^{こう} 2 乙 ^{おつ} 3 丙 ^{へい} 4 丁 ^{てい} 5 戊 ^ぼ 6 己 ^き 7 庚 ^{こう} 8 辛 ^{しん} 9 壬 ^{じん} 10 癸 ^き
b 支	1 貞 ^し 2 丑 ^{ちゆう} 3 寅 ^{いん} 4 卯 ^{ぼう} 5 辰 ^{しん} 6 巳 ^し 7 午 ^ご 8 未 ^み 9 申 ^{しん} 10 酉 ^{ゆう} 11 戌 ^{じゆう} 12 亥 ^{がい}
c 貞人 ^{ていじん}	1 貞 ^{てい} 2 賁 ^{へん} 3 爭 ^{じゆう} 4 己 ^き 5 古 ^こ 6 永 ^{えい} 7 丙 ^{へい} 8 尹 ^{いん} 9 兄 ^{けい} 10 狄 ^{てい} 11 黄 ^{わう}
動詞	
d	1 トト 2 貞 ^{てい} 3 占 ^{てん} 4 曰 ^{てい} 5 亡 ^{わう} 6 呼 ^こ (呼んで～させる) 7 令 ^{れい} 8 疒 ^ふ (疾) 9 受 ^{じゆう} 10 作 ^{さく} 11 雨 ^う 12 鳳 ^{ほう} 13 用 ^{ゆう} 14 諾 ^{だく} 15 及 ^{じやく} 16 聞 ^{もん} 17 先 ^{せん} 18 飲 ^{いん} 19 食 ^{じやく} 20 生 ^{せい} 21 媿 ^{けい} 22 告 ^{こく}
e	1 各 ^{かく} (来る) 2 入 ^{にゅう} 3 出 ^{しゅつ} 4 来 ^{らい} 5 追 ^{しゆう} 6 涉 ^{せつ} 7 歸 ^き 8 邁 ^{まい} 9 至 ^し 10 降 ^{かう} 11 在 ^{ざい} 12 從 ^{じゆう}
f	1 田 ^{てん} (獵をする) 2 獸 ^{じゆう} (狩る) 3 漁 ^{りゆう} 4 擒 ^{きん} 5 獲 ^{かく}
g	1 往 ^{わう} 2 省 ^{しゆう} (視察する) 3 德 ^{とく} 4 伐 ^{はく} 5 弔 ^{てう} (かき乱す) 6 搏 ^{はく} (武力で奪う) 7 侵 ^{きん} 8 馘 ^{かく} 9 共 ^{きゆう} (徴収する)
h 祭	1 奉 ^{ほう} 2 沈 ^{しん} 3 冊 ^{さく} [冊口] 4 燎 ^{りょう} 5 帝 ^{てい} 6 歲 ^{さい} 7 禦 ^ご 8 賓 ^{へん} 9 酏 ^い 10 告 ^{こく} 11 有 ^{ゆう} 12 有 ^{ゆう} 又 祐 13 取 ^こ 【11, 12, 13 には祭名動詞以外の用法あり】
名詞	
i	1 旬 ^{じゆん} 2 今 ^{こん} 3 翌 ^{じやく} 4 日 ^{じつ} 5 旦 ^{たん} 6 食 ^{じやく} (8時前後) 7 中 ^{ちゆう} (正午) 8 晨 ^{しん} 9 夕 ^{しやく} 10 月 ^{げつ} 11 星 ^{せい} 12 雷 ^{らい} 13 火 ^か 14 水 ^{すい} 15 雲 ^{うん} 16 山 ^{さん} 17 土 ^ど 18 稔 ^{れん} (年) 19 載 ^{さい} (年) 20 歲 ^{さい} 21 東 ^{とう} 22 南 ^{なん} 23 西 ^{せい} 24 北 ^{ほく} 25 上 ^{じやう} 26 下 ^げ 27 鳳 ^{ほう} 鳳凰
j	1 王 ^{わう} 2 衆 ^{じゆう} 3 邑 ^い 4 父 ^ふ 5 母 ^ぼ 6 子 ^し 7 女 ^{にょ} 8 婦 ^ふ 9 祖 ^そ 10 臣 ^{しん} 11 事 ^じ 使 史 12 吉 ^{きく} 13 禍 ^か 14 艱 ^{かん} 15 禾 ^か 16 黍 ^し 17 族 ^{しやく} 18 方 ^{ほう} (方国) 19 我 ^が 20 齒 ^し 21 崇 ^{しゆう} 22 寝 ^{しん} (寝宮)
k	1 牛 ^{じゆう} 2 牢 ^{らう} 3 牡 ^ぼ 4 羊 ^{じやう} 5 牂 ^{じやう} 6 馬 ^ま 7 麋 ^み 8 狐 ^こ 9 鹿 ^{ろく} 10 虎 ^こ 11 魚 ^{ぎゆう} 12 象 ^{じやう} 13 蠶 ^{さく} 14 虹 ^{こう}
l 固有名	1 商 ^{じやう} 2 周 ^{しゆう} 3 姁 ^{じゆう} (女性名) 4 好 ^{こう} (女性名) 5 媿 ^{けい} (女性名) 6 尹 ^{いん} (官名、方国名) 7 人 ^{じん} (方国名) 8 邛 ^{きゆう} (方国名) 9 召 ^{しやう} (方国名) 10 沘 ^ひ (方国名) 11 雇 ^こ (地名) 12 漁 ^{りゆう} (地名) 13 敦 ^{とん} (地名)
m 神	1 帝 ^{てい} 2 河 ^か 3 岳 ^{かく} 4 夔 ^き 5 土 ^ど
n 数	1 一 ^{いつ} 2 二 ^に 3 三 ^{さん} 4 四 ^し 5 五 ^ご 6 六 ^{ろく} 7 七 ^{しち} 8 八 ^{はち} 9 九 ^{きゆう} 10 十 ^{じゅう} 11 百 ^{ひやく} 12 千 ^{せん} 13 萬 ^{まん}
o 形容詞	1 大 ^{たい} 2 小 ^{せう} 3 多 ^た 4 赤 ^{せき} 5 元 ^{げん} (大) 6 媿 ^{けい} [女力](嘉)
p 其他	1 不 ^ふ 2 勿 ^ぶ 3 明 ^{めい} (否定) 4 弗 ^{ふく} 5 允 ^{いん} (まことに～) 6 亦 ^{いやく} 7 並 ^{へい} 8 于 ^い 9 自 ^じ 10 眾 ^{じゆう} (～と～) 11 之 ^し 12 其 ^き 13 夷 ^い (唯) 14 佳 ^{けい} (唯)

内容別甲骨文字簡表

山村健一：甲骨文字を漢字楷書に置き換える際、“ふさわしい意味”をもった漢字を選ぶ方法と、“ふさわしい字形”をもった漢字を選ぶ方法があるということですね。それで、どちらを採用したのですか。

佐藤久美：意味を読み解くことが目的ですので、ふさわしい意味をもった漢字を選ぶべきだと考え、そのようにしました。意味が確定できない文字については、字形に近い漢字を当てることにしました。

山村健一：具体的にはどのようにしたのですか。

佐藤久美：たとえば𠄎ですが、李圃の注によりますと“聞いて報告する”という意味でした。李圃は“聞”で置き換えるとともに、この字を構成する文字の成分を楷書に置き換えて“[耳+人]”（上が耳、下が人）を提示します。意味によった場合が“聞”で、形によった場合が“[耳+人]”ということです。“聞”について手元にある『全訳漢辞海』（戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編、2006年）をひくと“①きく”“③天子〔または上位者〕に報告する。申しあげる”がありますので、“聞”で置き換えても間違いはないと考え、“意味によった“聞”で置き換えました。

山村健一：字形によったものは、どのようなものですか。

佐藤久美：李圃の注によりますと、𠄎の意味は否定詞の“弗”に相当しますが、“弗”の甲骨文字は𠄎として、別にあります。そこで𠄎は、そのまま字形によって“弼”としました。また、𠄎の意味は“嘉”とされますが、字形は“[女+力]”です。意味によるという方針によると、“嘉”の字で置き換えることになるのですが、𠄎がどうして“嘉”の意味になるのか納得できませんでした。そこで、当面のあいだは、字形によって“[女+力]”としておくことにしました。

安井教授：甲骨文字のフォントは全て市販のものを使用したのですか。

佐藤久美：主には『今昔文字鏡』（エーアイ・ネット、2009年）によりました。漢字楷書に下線を引いたものについては『今昔文字鏡』に見当たらなかったため、インターネット上の「白川フォント」を利用しました。十二支の“子”の甲骨文字は二種類あげましたが、最初の「𠄎」は私が作字したものです。貞人の「𠄎 永」も私が作字しました。

《内容別甲骨文字簡表の利用》

安井教授：それでは、最初に提示した拓本の甲骨文を、表中の甲骨文字フォントに置き換えてみましょう。



𠄎子 / ト𠄎 / 𠄎𠄎 / 𠄎𠄎

山村健一：𠄎と𠄎ですが、拓本と甲骨文字フォントは鏡文字のように左右が逆になっています

す。これでいいのでしょうか。

安井教授：甲骨文を扱う便宜のため、甲骨文字フォントで“翻字”したわけですが、翻字としては、たしかに不正確ですね。しかし『今昔文字鏡』にフォントが全てそろっているわけではありませので致し方ありません。鏡文字について『甲骨文字の話』（松丸道雄著、大修館書店、2017年）によりますと「ある一字が、正反相方で自由に示されている。これは甲骨文字全般に極めて一般的に見られる現象である。」（128頁）とあります。このような鏡文字はふつうに見られ、意味が異なるわけではないようなので、とりあえずはこれで進めることにしましょう。どのような場合に鏡文字となるか、ということについては、今後、実物によって確認しましょう。山村君、「内容別甲骨文字簡表」を使って、この甲骨文字フォントに漢字楷書を当てはめてください。

山村健一：こういうことでしょうか。

𠄎 子 卜 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
a10 癸 b6 巳 d1 卜 c2 𠄎 d2 貞 i1 旬 d5 亡 j13 禍。

佐藤久美：「癸巳卜𠄎貞旬亡禍」ということですね。さきの『殷虚甲骨刻辞摹积总集』では「癸巳卜𠄎貞旬無𠄎」でしたから、𠄎と𠄎、禍と𠄎とが異なっていますが。

安井教授：𠄎と𠄎、禍と𠄎というように、漢字楷書への置き換えには、幾つかのやり方があります。私たちは「内容別甲骨文字簡表」によることとなります。佐藤さん、確認のために、日本語に訳してください。

佐藤久美：甲骨文は {干支+ト+貞人名+貞+問う内容} となっているということでした。 {干支+ト+貞人名+貞} に相当する部分は「癸巳卜𠄎貞」で、“癸巳にトして、𠄎が問う”。 {問う内容} に相当する部分は「旬亡禍」で、“旬に禍は無いか”。全体としては、「癸巳の日にトして、貞人の𠄎が問う。これからの十日間に禍は無いか。」という意味でしょうか。

安井教授：そうですね。佐藤さんが作成した「内容別甲骨文字簡表」、入門の段階ということに限定するならば、なかなか使い勝手はよさそうです。これから、実際に甲骨文を読みながら、この表に修正や追加をしていくことにしましょう。